ねりまの文化財

練馬区教育委員会
社会教育課
（文化財係）
☎3993-1111 内線 2766
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

わがまち再発見
秋の史跡散歩 10/10
―下練馬宿から田柄用水を歩く―

往時の面影を残す旧川越街道下練馬宿から氷川台地域まで、講師の説明を聞きながら、2班に分かれて文化財を巡ります。

▽日　時　10月10日（土）午前9時～12時（雨天実施）

▽集合場所　北町あおば公園（北町2丁目41番、東武練馬駅より徒歩2分）

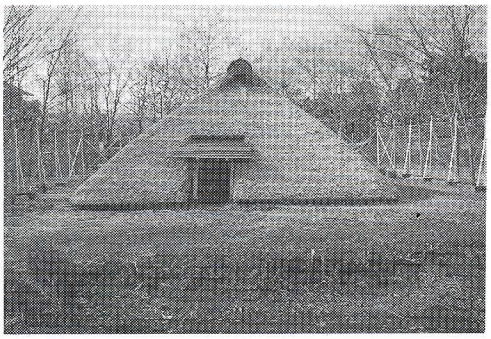
▽コース　下練馬宿に残る富士塚・道標、田柄川緑道沿いの庚申塔など各種史跡、文化財を巡り、氷川神社（氷川台4―47―3）で解散となります。約3.5km

▽参加方法　当日現地受付（午前8時45分～9時15分）

▽参加費用　1人50円（保険料）

▽講　師　郷土史研究家　林　勇
郷土史研究家　亀井　邦彦

また、11月には「秋の文化財講座」を予定しています。詳しくは区報をご覧ください。

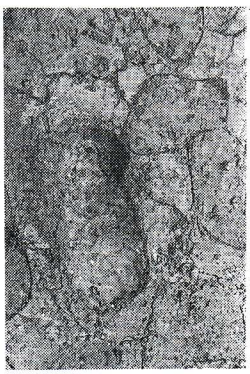


栗原遺跡の竪穴住居跡
（氷川台1－7）

9月17日、練馬区文化財保護審議会委員に新しく神奈川大学講師　浅井潤子氏（専門分野　歴史学）が就任されました。

南於林遺跡で平安時代の足跡が出土

前回16号にて、南於林（みなみおはやし）遺跡から、平安時代の水田跡が見つかった事をお知らせしましたが、今回、現地表下約2mの水田面で平安時代の人の足跡が数10個発見されました。足の大きさや方向が皆バラバラのため、一人の人間が歩いた跡ではなく、複数の人間が数回にわたって歩いたものと思われます。時代は平安時代の火山灰が足跡の中に入っているので、その頃のものと推定されます。また水田とは関係が無く、水田が放棄された後に、湿地状になったところを歩いた痕跡ではないかと考えられています。



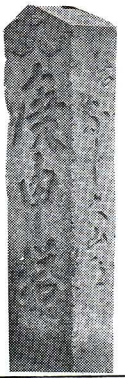
富士大山道

文化財保護推進員 桑島　新一

旧川越街道の下練馬宿に宝暦三年（一七五三）の不動明王座像が建っている①。大きな台石には「是れより大山道」と彫ってある。傍らに「左・高野山道」の道標もある。富士山や相州大山への参詣道はここから始まる。江戸時代中頃からこれらの山岳信仰が盛んになり、人びとは講をつくって参拝にでかけた。江戸から富士山までの道筋は二つある。甲州街道を大月で分かれ都留を通って富士吉田に向かうルートと、東海道を藤沢で分かれ大山を経て、須走口に達するルートである。練馬の道は、田無を通り、府中付近で甲州街道のルートに合流する。

不動像を後にすると、すぐ田柄用水に架かる棚橋である。左手のお堂に天明四年（一七八四）の子育地蔵が祀られている②。

新川越街道を渡ると道路は急に広くなる。



▲庚申塔 ③

二、三百メートル行くと、左に大きな文字の庚申塔がある③。文政四年（一八二一）「右・ふじ大山道」と彫ってある。道路の右は陸上自衛隊練馬駐屯地である。

しばらく行くと地下鉄有楽町線の平和台駅前の交差点にでる。富士街道と埼玉道の十字路で、地名を丸久保といった。左角の祠に馬頭観世音が祀られている④。ここは交通の要所であった証拠に、碑には富士、大山、八王子、田無、府中、新高野などの地名が一面に彫ってある。道路の様子は変わっても、古い道には古い石仏が多い。

八百メートルほど行くと、右側に新しい祠が見える⑤。中に子育地蔵や六十六部供養塔などが祀られている。ここは昔の一里塚で、木陰は旅人たちの休息場であった。今は環状八号道路の拡幅で、昔の面影はみられない。

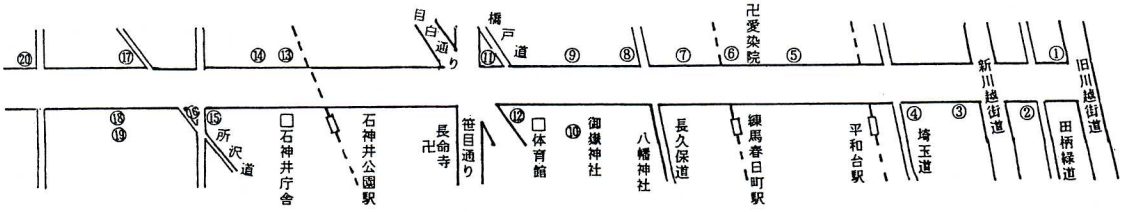
間もなく地下鉄都営十二号線練馬春日町駅の近代風な建物が見える。右側は名刹愛染院である。門前と境内には練馬大根碑や庚申塔など多くの石造物がある⑥。地名を中ノ宮といって上練馬村の中心地であった。

これから先は拡幅工事が未施工で道路は急に狭くなる。法務局登記所の先、右側の祠に延命地蔵が祀られている⑦。傍らに道しるべがあるが、磨耗していて文字は読めない。

二百メートルほど先、長久保道と交わる右角に以前、富士講記念碑⑧があったが、現在は高松の八幡神社に移されている。それには田無まで二里（八キロ）、富士山まで三十六里（百四十キロ余）と彫ってある。

さかえ幼稚園の先に元禄五年（一六九二）の庚申塔が小さな祠の中にある⑨。昔この辺に高松寺という寺が在って、門前に服部半蔵寄進の石の仁王像が建っていた。明治時代に廃寺になり愛染院に合併され、石仁王は近くの高松御嶽神社⑩に祀られた。練馬区の文化財に登録されている。

区立総合体育館の北側、橋戸道との分岐に祠が建っていて、安永四年（一七七五）の延命地蔵が祀られている⑪。その先、長命寺へ



の岐れ道に道標がある⑫。西・田無二里、府中五里、東・練馬宿と読める。

間もなく谷原の交差点にでる。富士大山道は笹目通りと目白通り（清戸道）を横切る。

左に長命寺の森を見ながらしばらく行くと西武池袋線の踏切である。

渡るとすぐ右側に消防器材置場がある。一隅に延享三年（一七四六）の庚申塔と、一里塚改修記念碑がある⑬。春日町の一里塚の次の一里塚（約四キロ）である。

石神井庁舎の先、右側の民間こども遊び場に、見上げるような地蔵尊が建っている⑭。同じ敷地に庚申塔や観音様も祀られている。

警察署、中学校、郵便局を左右に見ながら進むと、石神井学園前交差点にでる。手前左角の木陰にお堂がある。中に地蔵尊が祀られている⑮。元は道路の北側にあって、沼辺地蔵といった。沼辺はこの付近の地名である。

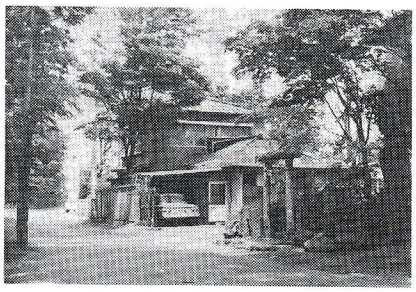
南へ少し入ると、旧所沢道の十字路に粗末な覆屋があり、庚申塔や供養塔が建っている⑯。灯籠に北・膝折道、南・高井戸道と彫ってある。

旧道を西へ再び富士街道に戻ると、北側の三角地に清楚なお堂があって、宝永三年（一七〇六）の延命地蔵が祀られている⑰。

そこから南を見ると欅の巨木が見事な並木をつくっている。道路の拡幅工事で伐られるところを持主の本橋さんが自分の土地を歩道に提供して、先祖伝来の貴重な欅並木を残した。傍らに「形見とて何か残さん、武蔵野の欅に勝る面影はなし」の歌碑がある⑱。

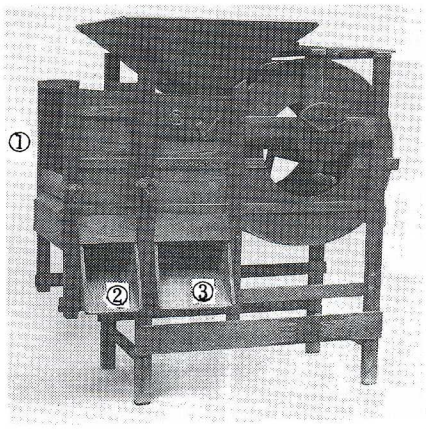
南隣のふるさと憩いの森に延命地蔵があって、右・小榑道、左・田無道の道しるべが彫ってある⑲。

ここから約千メートルで保谷市との境である。地名を高塚という。保谷市側に人の背丈ほどの馬頭観音の文字塔が建っている⑳。



▲昭和40年当時の富士大山道。街道沿いに富士講記念碑⑧（右端）があった。

郷土資料室収蔵品シリーズ　第13回



唐　箕

唐箕（とうみ）は、籾（もみ）すりをしたあと、玄米と砕米と籾を選別するのに用いた道具であり、元禄時代に中国から伝来したといわれている。

この道具が用いられる以前は、風が吹く日などに、選別する前の穀物を箕に入れ、高くかざして少しずつ落しながら、風の力を利用して選別していた。

唐箕は、これを機械化したものである。上部の四角な形をしたじょうご状のところから、選別する穀物を入れる。円形の胴の内部には、直交する四枚の扇板があり、外側のハンドルを回して風を起こすしかけになっている。出口は三つあって、上から落ちてくる穀物は、風の力によって選別される。一番軽い籾やわらくずは①遠くの出口から吹き出され、砕米やしいなは②遠い方の下の出口から、最も重い玄米は③近くにある下の出口から出る。

それぞれの出口には、籾や砕米や玄米が山のようにたまるので、混ざらないようにかき棒でかき分ける。これらは、普通、二人で操作し、一時間に五～七石を選別することができる。

関のぼろ市

文化財保護推進員　井口　敏

江戸時代から続く師走の歳時に「関のぼろ市」があります。毎年十二月九日に行われる関町北四丁目日蓮宗本立寺のお会式と翌十日の二日間、寺の境内及び門前に露店が立ち並び、人出は一〇万人と大変賑わいます。この市の由来は宝暦年間（一七五一～一七六三）からといわれています。文化文政時代の紀行文遊歴雑記には「十月二十八日二十九日に市立て諸商人来り集うこと」と書いてあります。明治になって十八年、十九年にぼろ市の時、境内で各々七日間大相撲興行が行われた記録が残っています。昭和の初め頃は寺の西側広場に、サーカス小屋、猿芝居、操り芝居、オートバイ曲乗他の小屋が連立し、軽快なジンタのメロディで人寄せをしていました。

その頃の食べ物で名物は、揚げまんじゅうやイマサカ（だ円で紅白の大福餅）焼きだんご、四角で大きい生のコンニャク等で、各々土産に買ったものです。又境内には農具、日用雑貨、衣類、そして古着類（ぼろ市の起名）等の店があり、遠近の人々は正月用の準備に買い揃えたのです。又その年に結婚した女性は花嫁衣裳姿で参詣に来たのをよく見かけました。ぼろ市の別名花嫁市で親しまれました。

現在は見世物興行はありません。勿論花嫁市の風習もなくなっています。露店は二五〇軒程並びその中には今でも、立臼、杵等売る棒屋、籠屋、桶屋、古道具屋、古着屋等の店もあって人気があります。

平成二年二月練馬区無形民俗文化財に関のぼろ市は登録されました。お会式と市が終わると、日毎に寒気が増し、冬至、大晦日、新年が慌しく近づいて来ます。

正月行事

文化財保護推進員　鈴木　曹元

今回は、羽沢の榎本良氏はじめ桜台の人々からお聞きした正月行事について、餅搗きを中心にご紹介します。

十二月八日の「お事始め」がすむと、ぼつぼつすすはきを始めます。餅搗きは、十二月二十日頃から二十八日で、夜から始めると明け方の三時頃、あるいは昼までかかりました。元旦を迎えた後、一月七日は七草で、前夜からきざんでおいた「なずな」などを入れたおかゆを食べます。十一日は、蔵開き。十四日は、まゆ玉だんごをつくり、けやきの枝にさし、神棚に供えました。これらは、現在もおこなわれています。なかでも、餅搗きは重要な行事でした。

この土地で作付けされる稲は、陸稲（おかぼ）もち米であったので、細い杵でよくついたものです。昔は今のように副食が豊かでないので、長期間大量に保存しました。そのため、順番を決めて近所の者がお互いに手伝い、普通六人くらいでついたようです。もち米は当日の朝から水につけておき、つき方は次のようでした。

(1)こねる＝この時は、臼の周囲を二人～五人で回りながら歌をうたいます。

(2)かけづき＝五人で調子を合わせて交互につきます。

(3)てあし＝一人で臼のもちをひっくりかえします。

(4)かけづき＝(2)と同じ

(5)あげづき＝一人で一臼をつき一臼ごとに交替します。

つき終えてから、あんもちを食べ、お酒もだしました。